

# 丸山敏雄と鳥居武二

——師弟の深い絆と交わり——

丸山敏秋

たとひ法然上人にすかさねまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、  
さらに後悔すべからず候ふ（『歎異抄』第二章）

はじめに

日本の敗戦が色濃くなった昭和二十年夏、丸山敏雄は東京都世田谷区深沢にあった三菱重工業株式会社の訓育部邸宅の管理人を務めていた。翌年は「しきなみ短歌会」を創設し、その翌年には「新世会」を結成して、生活の改善と道義の昂揚を掲げる倫理運動を創始する。すでに敏雄の身边には、その事業を内から支えようとする若い人たちが集まっていた。

敏雄から親しく薫陶を受けたそれら内弟子の中に、敏雄より六歳年下の鳥居武二がいる。ただし九州にいた鳥居は事情があり、最初期の弟子たちよりも駆けつけるのが二年ほど遅れた。しかし昭和七（一九三二）年に結ばれていた二人の強固な絆は、年月を経ながらいよいよ深まり、強まっていた。周囲から「忠僕」と呼ばれた鳥居は、敏雄にとって文字通りの愛弟子にほかならなかった。敏雄と出会わなければ鳥居の人生はまったく違った歩みになったのは間違いないし、鳥居の物心両面の助けがなければ、敏雄が命がけで始めた事業は順調に運ばなかったであろう。

本稿では丸山敏雄と鳥居武二という師弟の関わりと交わりの様子を、資料に基づいて明らかにする。主要な資料には次のものがある。

- ① 敏雄が鳥居に出した書簡（全七十一通。『丸山敏雄全集』第二十一巻および第二十四巻下所収。以下『丸山敏雄全集』には『全集』と略記）
- ② 鳥居と行動を共にした敏雄の記録（『全集』所収の日記や旅行記）
- ③ 鳥居の自伝『歩みこし道』（一九六〇年刊、全四六七頁）
- ④ 鳥居の敏雄に対する思い出の手記（『全集』別巻一および『丸山敏雄言行録集Ⅱ』所収）

なお、③の伝記はもともとが非売品であるため、今では入手困難で知る人もほとんどないが、とりわけ貴重な資料である。

鳥居武二が入院中の武蔵野赤十字病院で逝去したのは、筆者が六歳の誕生日を迎えた翌日だった。死因は肝臓ガンである。東京都下武蔵野市の高杉庵（倫理運動の発祥

地) のほど近くに居所を構えていた鳥居は、筆者にとっては記憶のない幼児の頃から身近な人であり、膝の上に幾度も抱かれたことがあったに違いない。父に連れられて病室を見舞ったとき、ベッドに上半身を起こした鳥居は、すでに黄疸を発症していた。両眼が黄色く濁っていたその顔が、まぶたに焼き付いている。自宅の書棚にあった『歩みこし道』を何度か繰ったこともあり、「いつかは鳥居先生のことを書きたい」と密かに思いつづけてきた。今ようやくそれを果たせることが嬉しい。

以下、引用文の旧漢字・旧仮名遣いは現代表記に改める。人物の敬称はすべて略し、丸山敏雄は「敏雄」と、丸山竹秋は「竹秋」と表記するが多い。